

リ ビ の カ

イースー

永沢道雄・陳澤禎 共訳

じかの

イースー

永沢道雄・陳澤植 共訳



ラテン語の「bene=よく」と「esse=生きる」
からつくったのがBenesse(ベネッセ)です。
私たちは、ひとりひとりの充実した生活や向
上意欲のサポートをしています。

永沢道雄（ながさわみちお）

1930年生まれ。53年朝日新聞社入社、整理本部長、編集委員などを
歴任。92年退社。主な訳書に『遠い戦場』（ルイ・アレン）、『西太
后』（高陽）ほかがある。

陳澤禎（ちんたくてい）

1946年南京生まれ。63年香港輔人書院を卒業。台湾を経て69年来日、
早稲田大学法学部卒。81年から台湾の有力紙「聯合報」東京特派員
となる。著書に『日本人と中国人』ほかがある。92年から、米ナッ
シュビル在住。

曾經深愛過 by Yi Shu

Copyright©1988 by Yi Shu

Japanese translation rights arranged with the author
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

リピカ

一九九七年九月十日 第一刷印刷

一九九七年九月二十日 第一刷発行

著 者 イースー

訳 者 永沢道雄・陳澤禎

発行者 池田清隆

発行所 株式会社 ベネッセコーポレーション

〒206-88 東京都多摩市落合1-34

電話 ご注文・問い合わせ(0480)23-9233

編集(0423)56-0940

印刷所 共同印刷

製本所 大口製本

©Michio Nagasawa、T.T.Chen

ISBN4-8288-1812-X C0097 NDC913 194 288P

乱丁・落丁はお取替えいたします

定価はカバーに印刷してあります

リ
ピ
カ

装丁
大久保春
写真
松村映三

1

鞍山から帰ってくると、いつも疲れてぐったりする。内地（中国本土）へ行つて商売した人なら、その苦勞がわかるだろう。体力も知力も極度の挑戦を受け、ちよつと油断すればたちまち負ける。

しかも明日はひきつづき會議をやり、来週には報告をまとめてさっそくピッツバーグに飛ばなければならぬ。

ここ二年、私はボールみたいに蹴飛ばされて行ったり来たり。

私は力いっぱい呼び鈴を押した。

お手伝いさんは出てこない。彼女は時間契約だから、毎日午後には屋内にいななければならないのに。

仕方なく私は鍵を出して玄関をあけ、トランク二つを屋内へ引きずり込んだ。大声で妻の名を呼んだ。

「リピカ、リピカ」

誰も答えない。男として、疲れ切って家へ帰ったのに誰も返事しないのがいちばん恨めしい。私はぶすつとして、コーヒーを注いですわった。

ティーテーブルの上には古い新聞と郵便物が積み上げである。私は手で顔をなでた。ひどくくたびれているが眠る気はなく、リピカが帰ったらいいいニュースを教えてやろうと思った。

私は厚手のオーバーコートをハンガーに掛けてから順番に冬の衣を脱いだ。カシミアのコート、真綿のチョッキ、毛のワイシャツ、メリヤスの肌着と、まるでちまきみたいだがそうでもない、零下十度の気温に耐えるには不足なのである。

顔を洗ってベッドの上で脚を伸ばした。眠る気はないが、いつしか夢路をたどった。リピカの香水の匂いが鼻をついた。これは何のブランドだろう。夜明けの森の露みたいだな。

玄関で音がした。私はもがきながら起き上がり、「リピカ」と声をあげた。

返事がない。私は寝室から手探りで出て行ったが、応接間には誰もいない。私の革靴がカーペットの真ん中にあるだけ。玄関をあけたがやはり誰もいない。今日はなんとうわの空なのだろうと腑に落ちなかった。

ベッドに戻って、手枕で休もうとした。

何だかやりきれず、また起きて台所へビールを取りに行くついでに両親の家へ電話した。

「帰ってきたのか。いつまた出発だ？」と父親。

「リピカが行かなかった？」と私は聞いた。

「来ないよ。彼女はもう半年も来ていない」と非常に不満そうな口ぶりだ。

私は少し悲しくなった。リピカと両親は始めから仲がよくないのだ。

「上役はどう言ってた？」

「協力の話はもう七、八割かた決まったが、あとアフターケアが難題でね」

「飯を食いにこないか。お前のところはずっと、ろくに食事をしていないんだろ」

「疲れすぎちゃってね」

「じゃあ休めよ」

私は妻の実家に電話を掛け直した。義妹が出た。

「お兄さん、上海で骨董品のダイヤのピアス、探して下すった？」

「探したかって？ 大体香港人が持ち帰るあんな物はね、上海人がよく保存しておいたように見せかけて香港の阿呆にうりつけるものなんだよ」

「よしてよ」

「リピカは行かなかったか？」

「来ないわ」

「マージャンやってるのか？」。あたりで人声がさわがしい。

「そうよ」

「がんばれよな」。私は電話を切った。

友達と出かけたのか、徹夜の仕事でもあるのか。一週間も彼女を見ていないので、少し気がかりだ。

サンドイッチを作って食べた。本当に体の節々が痛む。寝室へ戻って電気毛布を敷き、いっぺんにぐっすり寝込んだ。

夜中に寝返りを打ったら、テレビをかけているみたいなくどくどしい話し声が聞こえた。あ、リピカが帰ってきたのだ。彼女は深夜にテレビを見て十二時すぎにならないければ寝ない習慣がある。内容がくだらなくてもかじりついて心ここにあらず、次の日また起きられない時もある。私は安心して熟睡した。翌日、目覚まし時計に目を覚まされ、目を開いて叫んだ。

「リピカ」

返事がない。私は夜具をはねのけ、彼女を見に行った。

寝室はもとのまま。掛け布団はきちんとベッドの後ろに畳まれている。私ははっと気づいた。彼女は帰って来なかった。ゆうべ彼女ははじめから帰って来なかったのだ。一切は自分の幻覚だった。

あれは何だったのか。あの人は？

もう推測している暇はない。会社へ急がなければならない。不愉快な女だ。こんなに忙しい最中に気をもませて、私が仕事に全力を集中しなければならぬと知りながら、不必要な心配をさせる。

私は車を運転して会社へ急いだ。秘書にリピカの会社へ電話するようお願いつけた。

「それと、一時間ごとに家に電話してくれ。お手伝いさんが出てくるまでな」

午前中おちつかなかった。結婚八年の記憶では、リピカはまだ外泊しようとしたことさえない。帰宅してからの唯一の娯楽はテレビを見たり音楽を聞いたり。週末にはマージャンもせず、街にも出ずに家にいた。

これは今までになかったことだ。

会議が終わったら女性秘書があわてふためいたみたいに言った。

「周先生、周夫人はもう辞職なさったそうです」

「何だって？」

「周夫人はもう一カ月も前から仕事をしていないそうです」と彼女は繰り返した。

「もう一カ月？」あっけにとられた。

ああいう大会社ではやめさせるのに三カ月前の通知が必要で、彼女が一カ月も出社していないとすれば、四カ月も、つまり夏ごろから彼女はもうやめると決心していたのだ。なんて私に相談しなかったのだろうか？ 結局これはどういうことなのだ？ 私は書類を放り投げて、

「私の家では誰も出ないのか？」

「いました。お手伝いさんです」

「つないでくれ」

電話がつなぐと、すぐ聞いた。

「お前いつ奥さんを見た？」

「周先生ですか？」

「そうだ。尋ねるが、昨日は奥さんを見たのか？」

「周先生、奥さまは貴方とご一緒にお出かけになったと思っていました。このごろお二人がお出かけになるところなんて全く見ていません」

私はびっくりした。

「だいたい何日ぐらい前だ？」と私は追及した。

「たしか貴方が十五日にお出かけになって、その時はもう家には誰もいませんでした」

「なんでそれが分かる？」

「ベッドに人の寝た様子がありませんでしたもの」

私は心から呆れた。計画を立て、一切は準備万端、私のすぐ後に家を出て行ったのだ。

何のために？　そうやってからかうとはどういうつもりだ？　お互い大人なのだから、何があってもはつきり話をすれば分かるのに。

私はコートを取って家へ帰った。衣裳箱を開けてみたら、大部分の衣服は持ち去られていた。ルイ・ヴィトンのセットもそっくりなくなっている。

リピカは行ってしまったのか。私は信じられなかった。ひとことの書き置きもなしに行つて

しまったのか。

彼女はとても出不精な女で、世界中でいちばん居心地のよいのはこの家だと思っているから、ちよつと長い旅行でもいやがる。なのに今どこに居るのだろうか？

私は缶ビールを一口のんで気を静めた。私たちはけんかしたことはないし、彼女は何の不満をもちしたこともない。

ひよつとすると両親の所にいるのだろうか。どんなまともな女でも、つまらないことで腹を立てるものだ。彼女だってそうする権利はある。しばらくしゃんぼりしていたが、もういちど会社に戻って仕事にかかった。

緊張するでもなく思ひわずらうでもなく、ことによると退勤して家の玄関を開けると、彼女はもう客間にすわっているかも知れないと思ったりした。この日は忙しくて、やっとオフィスを出たのは七時だった。女秘書の疑わしげな目つき。きつと内心で思っているのだろう。周さんは奥さんとどうかなつちやつたのだわ。うちの会社、老陳と小李と阿張の次に今度はこのカッブルも駄目になったのね。

家の中は真つ暗だった。前はおそく家に帰ると、彼女は部屋の中にも廊下の小さな蛍光灯は必ずつけておいてくれたのに。

私はぐったりソファにくずおれ、電話を取って妻の実家と呼んだ。義妹が出た。

「彼女ほんとに来てないわよ。貴方たち、けんかしたの？」

「ちがうよ。貴女も知つてのように、彼女はすこし変わつてはいるけど、人と正面衝突したことはない。僕たちが結婚して八年、みつともない真似はしていない」

義妹は少し黙り込んでから、

「警察に届けましょうか？」

「冗談はよせよ」

「ひよつとして何か事件かもよ」

「事件なんかであるものか。衣裳箱もみんな持つて行つてしまつたんだよ」

「彼女、帰ってくるわ」

「それぐらい俺だつてわかる。でもこれはどういうつもりなんだろう」

「しばらくお父さんとお母さんに言わないで置いて。心配させないように」

「わかつてる」

「友達の家に彼女が行つていいのかどうか、聞いてみなさいよ」

「そんな探したりは出来ない」

「お兄さん——」。なにか、私を説得したそうな口ぶりだ。

「あさつてはピッツバーグに行かなきゃならない。もし彼女が戻ってきたら、おとなしくさせておいてくれないか」

「行かずにすまされないの？」

「だめだ」

義妹は話の接ぎ穂を失って、受話器を置いた。

本当に駄目なのだ。私もいくらか地位が高く高給だとはいえ、雇われている身だ。トップではないから、命令には従わなければならない。たとえ社長になっても、なおさら頭を使って頑張らなければならない。消えた妻を探す時間なんかない。

幾日か経てば、腹の虫もおさまって自然に帰ってくるだろう。

その日の夜中、うつらうつらに音楽の響きを聴いた。リピカがいちばん好きな悲しみの曲のいくつかだった。蚊の鳴くようなサウンドが殷々と伝わってくる。

前ならそれを聞くと起き上がってぴしゃんとドアを閉めたものだが、今夜は起きて彼女の部屋のドアを開けてみた。

「リピカ」

室内はがらんとして、ラジオもついてない。一面の暗やみ。前のように彼女がベッドで煙草を吸ってもしない。

そのあとは一晩じゅう眠れなかった。

東の空がだんだん白みはじめた。港にぼうつともやがかり薄紫にかすんでいるが、景色を楽しむ余裕もなく急いで会社へ出た。

入り口で張晴に出会った。オフィスボーイが出勤してきてドアの鍵を開けるのを待っている

のだ。

「ずいぶん早いんですね」と彼女。

「君だって」

「コーヒーをいれてあげましょうか?」

「ありがとう」

「お砂糖は一つね?」

「よく覚えているね」

彼女がコーヒーをいれてくれたが、私はまだ頭がぼんやりしている。彼女はさりげなく私と向き合ってたすわった。

「奥さまが家を出たんですって?」

噂が伝わるのは全く早い。

「彼女は東京にいるんだよ」と私。

張嘴は他人の不幸を面白がる気持ち、少しも隠そうとしない。

「何か問題はないんでしょうね」

私は心ならずも笑顔をつくらざるを得ない。

「心配してくれてありがとう」

「彼女が仕事をやめたの、ご存じありませんでした?」

「会社はまだ彼女の休暇中の給料を支払っていないから、私が代わりに取ってこなきゃ」

「周至美——」

「何だね」

「覚えておいて。もし貴方がた夫婦に何かあったら、次は私が第一候補よ」

この冗談は一、二年前から言いつづけている。以前は耳にすると、自分が女性に大もてなのだとしか思わなかったが、今日は特別に耳が痛い。

私は張晴を見た。

多くの男が張晴を活発で可愛い娘だと思うだろう。その名の通り永遠の太陽のようだ。ただ私はイギリスで教育を受けたので、曇り空に慣れている。しっとり濡れたペーブメント、黒紫のバラの花。女の子たちは象牙のように白い肌、憂愁を帯びたまなざしでないと、私の心を躍らせない。

私は鉛筆を取って、「さあ仕事だ」

「貴方って、いつもチャンスを下さらないのね」

「私には女房がいるんだよ」

「まあ成り行きを見るわ」

彼女は出て行った。

私は首を振った。あの娘はいつまでもあんな厚化粧をしている。目のまわりを黒くしてもま

だ足りず、まつ毛まで黒い油みたいなものを塗りつける。一本一本がごきぶりの足みたい。それでもこの街では名が知られている。

やっと九時になった。私は電話帳のイエローページを開いて、郭祠芬の番号を探した。先方は女の声が応じた。

「小郭探偵社でございます」

「小郭はいですか」

「郭先生は今日出張です」

「私は周至美といっています。こちらに電話下さるようお伝え下さい」。私は番号を教えた。

「承知しました」

何が出張なものか。小郭に仕事なんかあるはずがない。大方家でごろごろしているのだろうと、私はニヤリとした。その女秘書も馬鹿ではない。果たして三十分もしないうちに、向こうから掛けてきた。

「周至美、どうしたんだね」

「郭祠芬、余計なあいさつは抜きだ。ご足労ねがえないかね。相談したいのだ」

「近ごろは俺の費用は一流弁護士並みだぜ。出向くとなると、玄関を出た時から計算して一時間ごとに八百ドル（香港元）いただく」

「いい加減にしろ！」。私は怒って、「お前、机に座って金が稼げるというのか？」